

フィールドネットラウンジ報告書

企画名：「越境するケア：インド・アフリカ・英国をつなぐ＜社会的なもの＞の学際的考察」

企画責任者：濱谷真理子（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

アドバイザー：西真如（広島大学大学院人間社会科学研究科）

日時：2024年2月17日（土）

場所：京都大学稲盛財団記念館中会議室（対面とオンラインのハイブリッド開催）

プログラム：

13:00-13:05 開会の挨拶：Fieldnetからの挨拶

13:05-13:20 趣旨説明：濱谷真理子（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

13:20-13:50 報告1 仲尾友貴恵（日本学術振興会／国立民族学博物館）

「タンガニーカ／タンザニア大陸部におけるコージャと社会福祉の実践：人々の間でどのように線は引き直されてきたか？」

13:50-14:20 報告2 森口岳（東洋大学アジア文化研究所）

「南アジア系ウガンダ人の『甘さと権力』：ウガンダにおけるサトウキビと砂糖によるケア、そして社会的断裂について」

14:20-14:30 質疑応答

14:30-14:45 休憩

14:45-15:15 報告3 濱谷真理子

「奉仕からボランティアへ：英国移民街レスターにおけるインド系移民のセーフティー実践」

15:15-15:45 報告4 合崎京子（浜松医科大学子どもこころの発達研究センター）

「英国の障害者福祉政策と多様化する精神障害者コミュニティの現在」

15:45-15:55 質疑応答

15:55-16:10 休憩

16:10-16:40 コメント 西真如（広島大学）・東聖子（近畿大学）

16:40-17:30 総合討論

17:30-17:55 情報交換会

17:55-18:00 閉会の挨拶：濱谷真理子

実施報告

(1) 企画の狙い

本企画ワークショップの目的は、旧大英帝国の植民地主義下の歴史・記憶によってつながれたインド・アフリカ・英国において、インド系ディアスポラがどのように在地の「インド人」・アフリカ人・英国人などさまざまなアクターと交渉しながら独自の「社会的なもの」を形作ってきたのか、ケアの文化（Culture of Caring）に焦点を当てて明らかにすることであった。

20世紀初頭の西欧諸国による植民地化を機に、東アフリカには多数のインド系の人々が移住し、アフリカにおけるインド系の共同体を形成する。ケニアを中心とする東アフリカでは「インド人」問題が過熱し、さまざまなインド人弾圧・排斥運動や黒人アフリカ人とインド系移民の軋轢・衝突が続発するなど、インドとアフリカは複雑に絡み合った闘争の歴史を抱えてきた。たとえば、企画責任者濱谷のフィールドである英国東ミッドランド地方移民街レスターは、インド系移民が人口の約25%を占めているが、その背景には「ウガンダのアジア人 (Ugandan Asian)」と呼ばれるインド系移民が1970年代に東アフリカから大量に排斥され再移住してきた経緯がある(Mamdani 2011)。かれらにとって、アフリカはかけがえのない「ホーム」であり、今もなおホームの食文化や人間関係を大切にしつつ、時には里帰りや旅行に出かけるなど、アフリカとのつながりはインド系ディアスポラを考えるにあたって見過ごせない重要なファクターを成している。

だが、このようなインド・アフリカ間の密接なつながりにもかかわらず、インド研究者はアフリカに、アフリカ研究者はインドに十分な目を向けてきたとはいえない。その一因として、「英国」というファクター、すなわち英国植民地主義が両地域に与えたインパクトとその現代的展開が見過ごされてきたことが考えられる。本企画では、インド系移民がインドからアフリカに継承し、さらにアフリカから英国へと継承して現在も熱心に従事するケアの文化を切り口として、彼らが在地の「インド人」・アフリカ人・英国人と交渉しながら作り上げている「社会的なもの」に焦点を当てた。すなわち、彼らがどのようにフォーマルな社会福祉の制度／インフォーマルな人と人とのつながりを形作ってきたのか [関 2017, 市野川・宇野 2013, ドンズロ 2020]、文化人類学、地域研究、言語学などさまざまな視角から学際的に考察・議論することをめざした。

(2) 成果

以上の狙いのもと、本企画ワークショップは2名（仲尾・森口）が東アフリカをフィールドとする事例報告を、2名（濱谷・合崎）が英国をフィールドとする事例報告を行った。

仲尾報告では、〈社会的なもの〉を、西欧社会における経済自由主義がもたらす選択の自由とそれに伴う競争的状态の「残余」として理解する立場から、〈社会的なもの〉と重なる事象として、インド亜大陸出自者がタンガニーカ／タンザニア大陸部で展開してきた組織的社会福祉を、自由競争で劣位にある者たちへの支援の歴史として検討した。移民内マジョリティであった「コージャ」は二派に分派した後、EAMWS と BMMT という社会福祉組織を結成した。両者の目的はともにムスリムの福利向上であったが、1960年代、独立国家が社会主義的国民意識を形成する時期に、国家主義を支持できたか否かで、強制解体と公認へと明暗が分かれた。このような歴史的経緯の中で、コージャがもつインド亜大陸出自という側面が、排除のスティグマである「インド」性として変容していった。

森口報告では、東アフリカ、ウガンダにおける南アジア系移民の歴史とサトウキビの生態史を重ね合わせながら、ポストコロニアル状況にある南アジア系移民とウガンダ経済の関係を浮き彫りにした。発表では特にサトウキビとそれから作られる砂糖が「マテリアルなケア」としてどのようにウガンダの人々の生活に位置を占めているのかを示しつつ、サトウキビ・プランテーションの歴史とそこから作られる特権的な南アジア系の人々の様子を示した。またサトウキビの品種別での栽培などの植物研究との共同作業や人新世的な視点での分析が今後に望まれることを展望として述べた。

濱谷報告では、「ケアの文化」実践としてのセーワ（社会奉仕活動）を通じて、どのように既存の社会的差異を超えた〈社会的なもの〉が形成されうるか、インドの聖者シルディー・サイ・ババを信奉する信仰教団のボランティアを事例として考察した。それによって、さまざまな社会的背景を有するボランティア参加者が対面・オンラインでの友情を形成している一方、それは信仰共同体とは異なりあくまでも流動的でライトなつながりにとどまっていることも指摘した。

合崎報告では、英国における精神障害者（特に自閉スペクトラム症）に関わる法制度（Autism Act 2009）で目指されていることと、当事者の“lived experiences（自分自身で経験したこと）”との間にあるギャップを明らかにし、自閉スペクトラム症を持つ当事者たちがどのようにそのギャップを乗り越えようとしてい

るのかを描出したうえで、彼らにとっての「ケア」について再考した。以上を通じて、当事者同士のケアは、Autism Act で目指されていたソーシャルインクルージョンではなく、それを乗り越え、また別な形の手段としてのコミュニティを構築する形で体现されている可能性を示唆した。

以上の議論をふまえたうえで、コメンテーターの西氏からは、仲尾報告で触れられたヒンドゥー中心・亜大陸中心の「インド」性への疑義同様、大インド主義の影響への疑問が投げかけられた。また、東氏は、仲尾・森口報告が「インド・アフリカ・英国のつながりを背景とした社会的なもの」をケアの視点から着目するものであったのに対し、濱谷・合崎報告は「文化の文脈でケアをとらえ、ケアの創造性やよろこびに着目」した議論であったと総括した。

(3) 今後の課題及び活動計画

本ワークショップはあくまでも問題提起を主眼とするスタートアップ的な位置付けのものであり、インド・アフリカ・英国のつながりを宗教と社会福祉に着目して考察するという狙いはある程度果たすことができた。今後の課題として、以下3つを挙げておく。(1) 「ケア」「社会的なもの」「インド系移民・ディアスポラ」など鍵概念及び問いの精緻化、(2) ヒンドゥー教とイスラームだけでなくシク教やジャイナ教などほかのインド系宗教の慈善活動の調査、(3) インド・アフリカ・英国における人・モノ・カネのネットワークの調査である。次のステップとして、企画責任者は、英国レスターでの調査を継続するとともに来年度は東アフリカでの調査を実施する予定である。

<引用文献>

市野川容孝・宇野輝人編. 2013. 『社会的なもののために』ナカニシヤ出版.

関恒樹. 2017. 『「社会的なもの」の人類学：フィリピンのグローバル化と開発にみる繋がり』明石書店.

ドンズロ, J. 2020. 『社会的なもの』の発明：政治的熱情の凋落をめぐる試論』真島一郎訳, インスクリプト.

Mamdani, M. 2011. *From Citizen to Refugee: Uganda Asians Come to Britain*. Oxford: Pambazuka Press.